成長させてくれた日本人学校

広州／上海日本人学校元教諭
宮崎　遼

日本人学校に応募したきっかけ

私が初めて中国の日本人学校に応募しようと思ったのは、アメリカの大学に留学した時である。留学当初は、自分の英語に自信が無かったため、なかなか自分からアメリカ人に話しかける勇気がなかった。そんな時に初めてできた友達が、中国からの留学生であった。私は彼と様々な話をしていく中で、私と彼の間には非常に似ていることが多いと気づいた。外見だけでなく、箸や漢字を使うこと、日本のアニメや漫画を見て育ったこと、英会話は苦手だが英文法は得意なこと、おかずに醤油をかけること、直接的な言い方を避けるところなど様々な共通点があり、アメリカで私はアジア人ということを初めて意識し、中国という国への親近感と興味が湧いたのである。

彼のおかげで英語も上達し、現地のアメリカ人の友達もたくさんできた。大学の授業はついていくのが大変であったが、無事に留学を終えることができた。日本に帰国し、大学院を修了し、日本の高校で英語教師として働いていたが、近くて遠い存在であった中国のことをもっと知りたいという思いに駆られた。気付いたら海外子女教育振興財団を通して広州日本人学校に申し込み、無事に採用され派遣されることになった。

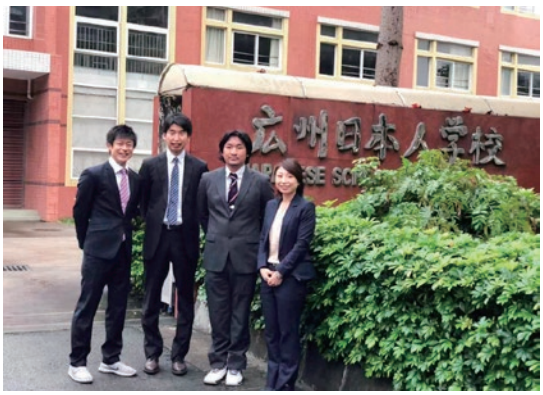
広州での素晴らしい出会い

私は日本で教員を一年しか経験しないまま広州日本人学校に赴任したので、今思うと教員として大変未熟だったと思う。授業が思うようにいかなかったり、他の先生に迷惑をかけたりと反省の毎日だったが、日本全国から集まっていた優秀な先生方に支えられて少しずつ教員として成長できたように思う。広州日本人学校には若い先生がたくさんおり、学校全体がエネルギーに満ち溢（あふ）れ、教育と真剣に向き合う毎日は本当に楽しかった。研究授業について熱く議論したこと、行事に向けて学年・学校が一致団結して取り組んだこと、仕事帰りにお酒を酌み交わしながら理想の教育を語り合ったこと、今振り返ってみるとこんなに教育と純粋に向き合えた環境はこの時が最初で最後になるかもしれない。

私を含めた教員が思う存分に働けたのは、保護者の方々が様々な場面で学校教育を支えてくださったからである。日本にいた時よりも、保護者との関わりが深く、運動会や夏祭りで朝早くから一緒に準備をしたことは楽しい思い出である。プライベートでも仲良くさせていただいた保護者もおり、今でも連絡をくださる保護者の方々には本当に感謝の言葉しかない。

広州では教員や保護者との出会いだけでなく、様々な中国人との出会いもあった。学校の事務や警備の人たち、中国語の先生方、スクールバスの運転手さんたち、住んでいたアパートの受付の方たちなど出会った多くの方々は、中国語があまり話せなかった私にもとても優しく、いつも笑顔で接してくれた。中国についての情報はテレビやインターネットからでも簡単に手に入るが、実際に現地の人と交流し、自分の目で確かめることが大切であると改めて感じた。しかし、もちろん日本人に好意的な人ばかりではなかった。日本人だという理由でタクシーの乗車を断られたこと、悪口を言われたこと、日本の加害の歴史について責められることも何度かあった。こうした中国人との出会いは、私に日中関係について考えさせる機会を与えてくれた。「どうしたらもっとお互いに理解し合えるだろうか」と自問自答したのをよく覚えている。

私は広州日本人学校の児童と交流した時の光景が忘れられない。それは日中両国の子どもたちが文化や言葉の壁を越えて笑顔で楽しそうに一緒に活動する光景である。その時私は「これからの日中関係はもっと良いものになる」「アジアはもっと平和になる」と確信した。小さい頃のこうした国際交流の経験は、彼らの異文化



一緒に採用された同期の先生たちと（左から二番目が筆者）

に対する考え方やアイデンティティに大きな影響を与えると私は思う。日本人学校で育った子どもたちが将来両国の懸け橋のような存在になったらいいなと思った。そして日本人学校が果たしている役割の大きさを改めて実感した。

コロナ禍で上海日本人学校への赴任

私は広州日本人学校で四年間勤務したのち、岐阜県の高等学校の教員になった。しかし、どうしても日本人学校での充実した日々を忘れることができず、二度目の日本人学校赴任に挑戦した。幸運にも上海日本人学校浦東校への赴任が決まったが、コロナの影響で人の往来がストップし、いつ赴任できるか見通しが持てないまま日本からオンラインで勤務することになった。もどかしい気持ちを抱えながら勤務していたが、八月下旬にようやく赴任できることが決まった。上海への直行便が無かったので、大連で二週間の隔離をしてから上海に入った。そして上海でもさらに二週間の自主隔離を行い、実際に学校で勤務し始めたのは国慶節が始まる前の九月下旬であった。

コロナ禍での勤務は何をするにもこれまでのやり方を変えなければいけなかった。現地の厳格な防疫ルールを守りながら教育活動を行うことは、想像以上に難しかった。赴任できない先生がいる中で、慣れない情報機器を駆使しながら勤務する毎日は大変であったが、生徒が楽しそうに授業を受けている様子を見ると本当に嬉しかった。コロナ禍で大変な思いをしてきた生徒たちを見ると、やり方を工夫してできる限り普段の学校生活に近づけてあげたかった。

二年目は生徒会の主担当になり、生徒たちとアイディアを出し合いながら、中学部集会、体育祭、生徒会選挙なども形を変えて復活させた。防疫ルールを守りながら実施することは、多大な労力を要したが、生徒たちと一緒に頑張ったことはとても良い思い出である。

帰国する数か月前くらいから、上海市でも感染者が増え始め、あちこちでアパートが封鎖される事態が起きていた。ある夜、私が住むエリアでも深夜からアパートが封鎖されると大家さんが教えてくれた。私は急いで荷物をスーツケース二個に詰め込み、夜遅くに近くのホテルに引っ越しをした。ホテルや空港も封鎖されるかもしれないという噂も出ていたので、すごく不安ではあったが、一週間ホテルに滞在した後に、無事に日本に帰国することができた。帰国後に空港やホテルも封鎖されたのでギリギリセーフの帰国となった。

日本人学校での経験を活かして

二回の日本人学校での勤務を終えて、私は二つのことを今後取り組んでいきたいと考えている。一つ目は、自分の専門性をさらに高めることである。日本人学校で研究授業に何度も挑戦する中で、もっと英語教育について研究したいという思いが強くなった。日本人学校で授業と真剣に向き合う日々が無かったら、私はきっとこんなふうには考えなかっただろう。現在、私はアメリカの大学院に在籍し、英語教育を研究している。いずれは日本の大学で英語教員の養成に力を入れていきたいと考えている。二つ目は、日中の懸け橋となる人になることである。中国は経済的にも文化的にも密接に関係している重要な隣国である。憎しみ合うのではなく、平和な関係が続いていくように、自分にできることを努力していきたいと考えている。今後は中国滞在中に学んだ中国語を活かして、日本にいる中国残留孤児の方々を支援するボランティアに参加したり、中国に滞在した経験を様々な場面で伝えたりしていきたいと考えている。

最後になってしまったが、この場をお借りして、ここまで私を成長させてくれた日本人学校と広州・上海で出会った全ての人たちに感謝を申し上げたい。遠くからではあるが、今後も日本人学校とその児童生徒の益々のご発展、ご活躍を祈念して、結びの挨拶とさせていただきたい。ありがとうございました。謝謝，再見。

楽しそうに一緒に活動する日中両国の児童

宮崎遼
東京学館新潟高等学校、広州日本人学校、岐阜県の高等学校、上海日本人学校浦東校での勤務を経て、現在サウスイーストミズーリ州立大学大学院修士課程に在籍し、英語教育について研究中。